

『三国志』から現代中国と世界を推理する — 易中天『三国志 素顔の英雄たち』を味わいながら —

関 下 稔

はじめに

筆者は国際政治経済学を専門とする研究者で、職業柄、日頃多くの本や資料を読んでいるが、余暇—かつては寸暇を利用して—but、現在ではそれが専らになっているきらいもあるが—を使った趣味の読書の世界に属することを論文風に論じたことはこれまでなかった。しかし以下で検討する『三国志』の人物像に関するものは、これまでの流儀を一変させるものである。とはいえ、これには趣味的な要素が濃厚にあるものの、同時に現代世界—特にアメリカを間において日本と中国との間のトライアングル関係—を考える際の大きなヒントを与えてくれるものでもあると確信している。筆者がそう考えるきっかけになったのは、易中天の『三国志 素顔の英雄たち』に出会ったことで、この中では凡百の『三国志』人物像を遙かに超えた深みのある、確かな人物像が描かれている。それは、著者である易中天が社会科学と歴史唯物論 (historical materialism) の基礎知識と方法を十分に踏まえた上で、政治的な洞察力豊かに精緻かつ深甚に論じているからで、その出来映えは見事なものであり、十二分に検討に値するものだからである。それは同時に確かな見取り図を失って混迷している、変転常なき現代世界を論ずる際にも大いに参考できるものである。そこで筆者はこの本に触発されてその中心的な人物像の評価を論じるとともに、現代中国と世界についても合わせて考えてみたい。というのは、中国では何か大きな戦略的変更を意図する場合には、広く一般に知られている歴史的な故事や古典的な書物を基にして、そこからの類推や比喩を使って論ずることがこれまでしばしばとられてきたからである。したがってこの『三国志』論にも何らかの政治的な意図が投影されているのではと推測したいからである。なおここでは大衆小説を俎上に乗せるという対象の特性に鑑み、堅苦しい証明や典拠に依拠せず、また史実 (正史) と小説 (演義) との齟齬や乖離といったことも考慮せず、創造力を発揮して自由奔放に論じることを許容していただきたい。その方が遙かに豊かな内容をもつものになると思われるからである。

1. 私の『三国志』遍歴

私は『三国志』が好きだ。今でこそ、映画やゲームや小説などで『三国志』は日本中で人気沸騰し、何度かのブームを繰り返しながら日本人の中にすっかり定着しているが、私の子供の頃、一部の根強い愛好者はいたが、現在ほどには国民的な人気の題材ではなかった。私が最初に『三国志』に接したのは、小学校低学年の頃、少年少女世界名作全集の1冊として出ていた羅漢中原作本のダイジェスト版（日本の翻訳者兼要約者は忘れてしまった）である。その後ラジオで流れた吉川英治作の『三国志』の放送をよく聞いた。徳川夢声の語りを中心にして、小沢栄太郎などが出演していた。子供心にも徳川夢声の絶妙の語り口と小沢栄太郎の野太い声が印象的で、いつまでも耳の奥に残っている。その後、吉川英治の『三国志』を貸本屋で借りてきて、夜な夜な暗い裸電球の下で、腹這いになったり、寝転んだりしながら、夢中になって読みふけた。後に中学校に入ってから平凡社の中国四大奇書シリーズの一つとして出ていたものを購入してきて（当時の値段で、2冊セットで900円）読んだが、吉川英治のものとはいささか趣を異にしている、むしろ、この原作本のほうが深みがある印象を受けた。というのは、吉川本では孔明（ここでは諸葛亮というフルネームではなく、私のイメージの中にある名前を使うことにする）の死で事実上終了し、後はその後の歴史が簡単に付録程度に書かれているだけだった。それは、彼が曹操と孔明という『三国志』を飾る本当の意味での二人の主役が舞台から退くことによって、事実上物語は終了したものと考えた—この考えは多くのその後の日本人作家が踏襲している—からで、その方が小説としてはすっきりしている。そして全体としては劉備を先頭にして、関羽、張飛、趙雲、孔明などがその下に集まる「義」に焦点を当てて、その義が実現しない悲劇性を押し出すことが主要なトーンであった。それは当時の浪花節や講談でもよく使われていた常套的なやり口で、義理人情たっぷりの思い入れで描くものである。これも一つの描き方だが、原作本を読んでみると、そうした意図が前面に出てくるよりは、むしろ歴史のおもしろさや非情さやリアリズムが強く感じられてくる。あれほどの努力を傾けながらも、結局は蜀は滅んでしまったばかりでなく、最強の魏も司馬一族に乗っ取られ、最後に残った呉もまた司馬氏の晋によって滅ぼされる顛末が延々と語られているからである。そしてこれまでは劉備や関羽や張飛や趙雲や孔明が好きで、彼らの悲劇的な最後—趙雲だけは老衰して静かにフェードアウトしていくが—に深く感情移入し、涙していたが、この原作本を読んで、密かに司馬懿のファンになった。演義三国志では孔明の敵役で、いつも出し抜かれる引き立て役にされている、少々間抜けな人物として描かれている。周瑜も同様の役回りをさせられているが、彼は途中で狂い死にすることになって、いささか気の毒でもあるが、司馬懿（漢字を探すのが面倒なので、以下では仲達とする）は最終的な勝利者になる。そのしたたかさにすっかり感服した。そしてまたそれが歴史の醍醐味でもあると得心した。そんなことで、吉川本は一、二度でやめたが、原作本は折に触れては繰り返し読み、しまいには人物やストーリーの展開順

序などに関してノートを取ったりもした（その後平凡社の四大奇書を全部購入し、『水滸伝』についても同様のことをした）。今風にいえば、中国古典のオタク人間ということになるだろうか。

このように私の少年期の読書遍歴の中で『三国志』は忘れがたい印象を残したが、その後、関心が別のところに移ったこともあって、たまに三国志演義にふれたエッセイや評論—たとえば花田清輝のものなど—を読んだり、馬超の木像を思いがけずに骨董屋のウィンドウで見つかりして、密かな感動と懐かしさを覚えたりしたが、次第に視界から去っていった。その中で柴田錬三郎の二部6冊本が、原作と同じく最後まで描いていて、印象に残った。彼は第二部のほうの主角を姜維において、孔明と同様、その志は高くとも、所詮は力不足によって最終的には国を失うという悲劇性を前面に出していた。いずれにせよ、何十年か経って、『三国志』は私の視界からすっかり消えていたが、それが突如復活することになる。それは光栄がゲームの『三国志』を出したからである。当時はパソコンが普及しだした頃で、光栄は『信長の野望』と並んで『三国志』をゲームの主力において売り出していた。これを買ってはじめてのが、私にとって『三国志』の復活劇の始まりであった。光栄の社長を大学に呼んできて講演してもらったが、私の関心は『三国志』のゲームそのものにあった。それこそめり込むようにそれに没入し、一時は研究も何もかもすっぽらかして、熱中していた。このゲームを購入すると入っている、中国全土の白地図を大量にコピーして一年ごとにゲームを止め、その時の武将の配置やその兵力などの状況を白地図上に書き込み、またそれとは別に数ヶ月ごとの推移と展開をノートに記録して、比較検討したりした。その結果、登場人物のほとんどの数値（武力、知力、人望など）と寿命などを大方諳んじることができるようになった。そして自分のイメージにある武将像とは違う数値の武将にしている、その扱いの不当さに大いに不満を感じたりした。同時に、『三国志』関係の小説、ゲーム攻略法、武将データ、解説書、読本、人物辞典、それに他の『三国志』ゲームなどが多く出版されるようになり、一大ブームが訪れたが、それらを大抵は買ってきて検討したりした。また中国の成都や長江など、『三国志』ゆかりの地を旅行して、その旧跡を見たり、その際に買ってきた書画（もちろんコピー品）やグッズや武将の切り絵を我が家に飾ったりして、悦に入っていた。

そうしたことを繰り返すうち、これらの『三国志』の描き方がステレオタイプで、常套的なことに大いに不満になった。大抵が上で書いたように劉備を中心にした義を旗印にした、麗しき主従関係とその悲劇性を謳うものであった。したがって、感情移入した劉備陣営の人物に甘く、それ以外の陣営の人物には辛いという描き方である。このマンネリズムにどっぷりつかって『三国志』のゲームをしていると、「どうもなあ…」という感じになってくる。もっともゲームの醍醐味は、そうした非力で悲劇的な劉備陣営が最終的には中国の完全制覇にいたるという快感にある。現実には到底実現し得ない夢がゲーム上では実現できるのである。そうした爽快感がゲームを繰り返し、飽きもせず続ける心の奥底にある。とはいえ、ゲーム設計思想の貧弱

さと現実離れには辟易させられる。こうしたジレンマ、つまりは一方での劉備善玉論と麗しき主従関係を基本に据えた設計思想と、したがってその目標の実現不可能だという悲劇性と、他方ではゲーム上では中国制覇を達成できるという、非現実的な爽快感との間の曰く言い難いジレンマの中で回遊し、あるいはその中に沈殿し、どうしても抜け出すことができなかった。もちろん、こうした常套的な三国志観とは少し違った、一ひねりしたのもあったが、基本的には同工異曲であった。たとえば、陳舜臣が曹操を中心において描いたり、伴野朗が呉を中心にして描いたりして、少しは目先が変えられていたが、その本質においては同じであった。その中では最近のジョン・ウー監督の映画「レッドクリフ」は赤壁の戦いに焦点を当て、中国人民解放軍の兵士などをエキストラに大量動員し、CG効果などの処理も加味して活劇映画として迫力あるものになっていた。ここでは周瑜と孔明の友誼を中心においた作劇になっていて、曹操を演じた役者も薄っぺらではなく、堂々とした悪役振り一でもやっぱり悪役なのだが一で、見応えがあった。しかし何かが違うのである。

2. 度肝を抜かれた易中天『三国志 素顔の英雄たち』

こうしたジレンマから脱却することができる刮目すべき書物について出会った。それがここで取り上げようと思う、易中天『三国志 素顔の英雄たち』（鋤柄治郎訳、富山房インターナショナル、上、2008年、下、2009年）である¹⁾。文字どおり度肝を抜かれ、目から鱗が落ち、また読後、長年の胸のつかえがおりて、爽快な気分になり、同時に大いに考えさせられたりもした。なによりも驚かされたのは、そこでの主要な登場人物（特に曹操、孔明、孫権）にたいする人物評価が的確で深みがあることだが、その的確さと深みの基礎にあるのは何かを考えていたら、終章でこの本を書くにあたって、著者がマルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』を改めて読んだという一節を目にし、なるほどと納得した²⁾。こんな用意をして『三国志』を論じたものなどこれまでお目にかかったことがなかった。私が既成の三国志論に不満だったのは、歴史研究と称して、実は単なる文献考証的なアプローチに留まっていたり、小説家特有の人間関係に力点をおいて、歴史的背景抜きに人物が独り立ちして行動できるかのようを考え、またその人物像もステレオタイプで—その底には安易な勧善懲悪的な価値観、それも劉備善玉説に重きを置く極めて歪んだそれがあるが—現代人の感覚で歴史的人物を処断するやり方をとったりしていたことである。そのことは結局、極めて通俗的な人間解釈と薄っぺらな政治ドラマ仕立てに繋がっていく。それを易中天は歴史ドラマと考え、歴史の中での人物像の描写とその彫琢のため、歴史唯物論の手法に磨きをかけ、それに依拠して論じようとしており、その姿勢の高さ—大衆小説の世界に社会科学と歴史科学の手法を投影させる—にまずは感服した。実際にそこに描かれている曹操と孫権—さらには魯肅と陸遜も鮮やかに現実的な光を当てられている—は秀逸であり、孔明像—それとの関係では劉禪像も単なるほんくらではなく、味

わい深く描かれている一も確かなものである。それにくらべると、劉備像はかなりぼやけてみえる。この男が本当は腹黒く、狡猾な人間だったのか、それともかなり無能だった男—主人公をこうした無能そうなタイプに描くのは『水滸伝』の宋江もそうで、一つのパターンだが、ただしその場合は宋江が実際に存在していたため、現実とかけ離れた英雄像を造れなかったことにあるが一なのか、あるいは出自の良さを誇るだけの器量をもった、それなりの政治的才幹に長けた人物なのかはわからずじまいである。ただし、後者を最大の武器にしての上上がろうと考えていたと解釈すれば、彼の外見上のほんくら振りや非力さや優柔不断振りも、そしてそれでいながら妙に肩肘張った立ち居振る舞いもそれなりに理解できる。実物の劉備もそうした多様な性格を合わせ持った複雑な人物—旧体制の名門門閥の出身者でありながら、現実には落魄している連中にしばしば見受けられる—だったとみると、ここでの易中天の解釈は的を得ていることになる。もっともらしく振る舞っていても、外見上は曖昧でほんやりしていてさっぱり要領を得ないが、ここぞというときには簡単に君子豹変することこそがこの人物の最大の特徴のようである。そこで、少し内容に踏み込んでみよう。

まず第一は曹操と孔明をこの時代の表裏を体現する人物として位置づけていることである。時代は後漢の末、世が乱れ、劇的な変化を遂げようとした時である。このときに登場した曹操は基本的には誇るべき出自はなく—それどころか、宦官が金で官位を買い、養子を取って子孫を残した、その末裔という、はなはだ後ろめたいものである—支えになる門閥もなく、徒手空拳から身を起こし、機知と能力と率直な言動という人物的な魅力を基に必死の努力の末、次第に頭角を現していくことになる。そこでの彼の基本政策は人物本位に抜擢し、厚遇していくことであり、能力主義を第一にしている。こうした立場にある人間が実力での上上がっていくには的確で、妥当な戦略である。わが国の豊臣秀吉を彷彿とさせるその知力と説得力—そのため、無類の「人たらし」と秀吉はいわれたが—である。そして自身の本心は表面に出さず、他人の意見に耳を傾け、その助力や献策を尊重し、そしてその手柄を自分のものとせず、家臣を立て、尊重したため、貴重な助言を得て自らの構想もふくらみ、多くの人材に恵まれ、次第に頭角を現していった。だから曹操を一言で表せば、人材発掘と人材登用の人だったということになる。この曹操が一大転機を迎えたのは袁紹との官渡の戦いである。文字通り生死、存亡をかけたこの一大決戦に勝利したことで、その後の曹操の隆盛への道が開かれた。そこでの曹操の見事な戦略眼、大胆不敵な戦術、機微を捉えた巧みな展開、沈着冷静な頭脳のささと太い肝っ玉は見事としかいいようがなく、相手の袁紹のそれらと比較すると、際だっている。だからこそ、数倍する敵の兵力、領土、財力、名声などをものともせず、苦しい持久戦に耐えながら、最終的な勝利を掴むことができた。おそらく後漢末から三国時代にかけての回天の契機になったのは、この戦いだっただろう。そしてこの持久戦の中で味方の中にあつたさまざまな裏切りの企てや疑心暗鬼の兆候を戦後一切不問に付して、占領した袁紹の本陣の機密文書すべてをみんなの見

ている前で焼いてしまった。その結果、曹操の声望は高まり、漢室の再興を掲げるその錦の御旗も効いて、丞相として最大の実力者にのし上がり、地方の反乱を鎮圧し、中国全土の統一的な秩序回復の主導権を握ることになる。「清濁併せ呑む」その度量の広さと機知が受けたのである。

さてこの曹操がいったいつ頃から、漢を廃して自らが帝位に就く野望を持つようになったのか。これが『三国志』全体の中で最大のテーマであり、また謎でもある。当初からそうした野心を隠していた腹黒い人物だというのが、常套的な曹操解釈であり、そのために「治世の能臣、乱世の梟雄」とか「奸雄」という曹操の人物評が一般的にはよく使われている。しかしそうではないと易中天は考える。というのは曹操にはそうした野心を抱くほどの実力も門地も出発点においてはなかったものであり、董卓への公然たる反旗も命がけなら、袁紹との対決も必死の戦いであったからである。それが地歩を固めるにともなって、次第に変化するようになる。忠臣から逆賊への変節、それはナポレオンはいつから革命政府を廃して自ら帝位に就こうとする野望を膨らませるようになったのか、あるいはまたその甥のルイ＝ナポレオン・ボナパルトが選挙で選ばれた大統領から、一転してクーデタを経て皇帝に登り詰めていく道を取るようになったのはいつからかを想起させるテーマでもある。ただし、最終的には自らはその野望を秘めたままに途中で頓挫したため、もし息子の曹丕が漢を廃して自ら魏の帝位に就かなかつたら、曹操の野望は表面化せず、あるいは後世の人々の非難的にはならなかったかもしれない。その意味では曹丕の成功は結果的には曹操の化けの皮をはがし、その評価を下げることになるという皮肉な結果をもたらした。このテーマに迫るのに、曹操悪玉説に立てば、そもそもはじめからそうした野望を隠して、時節の到来を待っていたということになり、偽善者・陰謀家＝曹操として単純至極である。しかしそうではなく、条件の変化によって途中から変節していったという観点に立つ—それこそが実際の曹操だったと思うが—と、研究しがいのあるテーマになる。その明確な契機になったのは荀彧との決別である。荀彧は曹操を支えた最高のブレーンだが、漢室の再興を基本において、曹操が丞相—三公の上に君臨する政治・軍事・行政上の大権として復活させた—として実権を掌握することをめざし、天子を奉じて民意に従う（大順）、公正無私を以て英傑を心服させる（大略）、正義を発揚して英雄を招き寄せる（大徳）の三大綱領³⁾を献策し、それを曹操は実行していくことによって成功を収めていくことになるが、その結果、逆にそれが曹操を終生縛ることもなった。実力者としての強大化にともなってそこからの密かな逸脱が、そしてやがては魏公となって—社稷と宗廟を許される—潜在的には漢からの独立が可能な地位への昇段が始まり、次第に両者の乖離を生み、最終的には荀彧の悲劇的な死によって終わることになった。そして曹操の野望の膨張にともなって独裁的傾向が強まり、部下—といっても形式的には漢の家臣としては同僚なのだが—の粛清が強まることになる。この曹操の野望は荊州を制圧し、次に孫劉連合を赤壁で打ち破っていれば、あるいは実現したか

も知れない。その意味では赤壁における孫劉連合の形成こそは曹操に野望の頓挫を強いた決定的な要因であった。そこで曹操が荊州制圧で一服おかず連続的に呉に戦いを挑んだこと、ならびに根拠地がないためにそれまで各地を放浪し続けた劉備を葬り去るチャンスが何度もあったにも拘わらず、そうしなかったため、台頭のチャンスを与えてしまったという、致命的な戦略的誤りは、献策するブレンの不在—特に郭嘉の夭折—にあったと易中天は断じている。荀彧のように漢室の再興の下での実権の掌握というイデオロギーに固執せず、だからといって賈詡のようにテクノクラートに徹して個人的な領域には深入りしない—そのため、曹操の後継者問題に関しては家庭内の問題だとして助言を婉曲的に拒否した—のとは異なり、郭嘉は年も若く、かつ曹操の個人的な領域にまで立ち入ることができた—つまりは曹操が心を許した—唯一のブレンであった。その彼を失ったことが、曹操の慢心と猜疑心を助長し、歯止めを失って、飽くなき個人的な野望の暴走を生む—しかも稚拙で粗暴な方法を使って—ことになったと見ることができよう。ただしその彼でも前記の三大綱領が邪魔になって、魏朝を打ち立てるという最終的な—ルビコンを渡る—決断を下せないままにこの世を去ることになる。その点では曹操と曹丕の関係はカエサルとオクタ비아ヌスの関係に似ているかもしれない。

第二に、そうすると、曹操の野望に待ったをかけた赤壁の戦いで孫劉同盟を生み出した主要人物としての孔明と魯肅、そしてそれを容認した孫権と劉備の人物像が大事になる。そこでは孔明と魯肅がともに凶らずも戦略的には三国鼎立論—天下三分の計—を構想していたことで、魯肅は曹操、孫権、劉表の、孔明は曹操、孫権、劉備の、三者の鼎立を考えていた。しかし、劉表が死に、荊州が曹操の支配下に入った以上は、それに対抗するには孫権と劉備の同盟に依拠せざるを得なくなる。この二人が孫権と劉備を後ろ盾にして遭遇した後、たちまちのうちに意気投合し、互いの構想を微調整させながら、赤壁の戦いを準備していくことになる。そして実際の赤壁の戦いで軍事的指揮権は周瑜にあり、彼がこの圧倒的に劣勢な戦争を勝利に導いていくことになる。曹操との融和—実際は足下への屈服—ではなく、対抗と呉の自立性の維持への最終的な決断を下したのは、孫権である。迫り来る曹操の圧力と内部にある投降論—張昭に代表される多数派—を排して開戦へと舵を取ることは至難であり、彼は幾多の逡巡の末、最終的な決断を下す。その時、剣を抜いて卓を両断して、今後この決断に異を唱えた者はこのとおりになると見得を切った姿は『三国志』の最大の見せ場であり、まさに千両役者の感がある。彼は曹操、劉備の後塵を拝した形で、『三国志』の中では目立たない、いわば第三の人物として描かれているが、実は彼こそは『三国志』史上、最大の人物ともいふべき大政治家で、沈着冷静にして、自由自在に戦争と和平の間を行き来し、ここぞというときにおける断固たる決断を下した、遠き益（長期的利益）を考え、権に応じ（時勢の動きを見極め）、変に通じた（情勢の変化に応じた適切な対策を講じた）、弘く思う（深謀遠慮をもった）、類い希な雄略の才に恵まれた人物⁴⁾として、易中天は極めて高い評価を与えている。隠忍自重を重ねながら、い

つか日の目を見る時を夢見て、奢りもせず、卑屈にもならず、ひたすら腰を低くしながらも堂々と胸を張って生きていった孫権の前半生を易中天は色鮮やかに描いている。この孫権像は誠に鮮明であり、本書の中の白眉と言ってもいいだろう。父（孫堅）、兄（孫策）に次ぐ三代目として、その間に培ってきた強固な主従関係を基礎にした孫権は部下に恵まれ、それらの人間関係を巧みに操縦して、成長・巨大化していき、最終的には三国の一つとして確かな地歩を築いたが、とりわけ周瑜（赤壁）、魯肅（同）、呂蒙（荊州奪取）、陸遜（夷陵）の四名将がそれぞれの時期に決定的な役割を果たしたことが、彼の成功を大いに助けた。その意味では強固な地盤と人的紐帯と、さらには地の利に恵まれた勢力であったし、それらの利点を孫権は最大限に活用した。

第三に、これらに対比すると、劉備像はあまり鮮明ではない。それは曹操や孫権に比較して劉備自身が際だった特徴を持っていないことにあり、またいつも逃げ回っていて、大才を示す機会に恵まれず、もっぱら「髀肉の嘆」をかこつことになっていたからでもある。また荊州に根拠地を得、そこから蜀の奪取に向けた画策と行動も劉璋の降伏という形で、平和裡の政權交代を果たした点では成功を収めたが、その間の権謀術数振りは日頃の劉備らしくないダークな印象を与えている。そして宿願を果たして無邪気に成功を喜ぶ劉備を龐統が窘めると、気分を害したという一節もある。またなによりも、関羽の復讐戦を意図した呉との夷陵の戦いで敗北して国力を疲弊させ、人心を失い—この戦争に反対した趙雲を遠ざけるなど—自らも死を迎えることになるという結末は、劉備の能力を一層疑わしいものになっている。だがこれらは、劉備が理想化された聖人・君子でなかったことは確かではあれ、したたかな現実政治家であったことを逆に物語っていて、この乱世を生き抜く知恵と才覚を十分に備えていたことになる。ただし、曹操や孫権ほどには傑出していなかった—だからこそ宗室の出身であることをことあるごとに強調せざるを得なかったわけだが—というだけである。したがって、曹操の裏返しの人物としての孔明の傑出振りが嫌が応でも目立つことになる。さて孔明像をどう塑造するか、それが最大のポイントである。孔明が不世出の政治家・外交家・行政家であるという評判はあまねく浸透していて、それを覆すことは至難に等しい。事実、これらに関してはいずれも優れた能力を発揮している。だが、天下三分の計の献策や孫劉連合の結成や根拠地としての荊州の奪取などでの功績もさることながら、劉備亡き後、曹操と同じく丞相となって全権を掌握し、誕生間もない蜀の統治に捧げたその努力と成果の中にこそ主要なものがあるといえよう。その点では劉備亡き後の孔明の立ち居振る舞いや、それとの関係での劉備の息子の、暗愚の典型とされてきた劉禪の評価が味わい深い。孔明が丞相として実権を掌握しながらも、曹操のように帝位に就こうなどという野心を抱かなかつたこと、あるいはそうする必要がなかつたことが劉禪との主従関係の中にあると見ている。つまり名目的な元首—天子—としての劉禪と、実際の統治—丞相—を担う孔明との役割分担である。それには孔明ばかりでなく、劉禪の方のスタンス—

全幅の信頼とまではいかないまでにせよ、時には煙たい存在と敬遠したい気持ちを抑えて委せていたこと—にも大いに評価すべきものがあるということである。劉禪がいわゆるほどの暗愚ではなかったことは、孔明死後に親政を試みたことや、結果的には敗北—それも投降という形での最小限の犠牲で—したとはいえ、複雑な蜀の政治—内政と外征—をある程度采配して、ともかくも30年ほどの余命を持ちこたえたことである。

希代の傑物として孔明は政治、外交、行政の全てにおいて優れ、かつまた人格も秀でて、人民の敬愛的、つまりは理想的なリーダーであったとはいえ、唯一ともいべき欠点は軍事の才能がなかった—反対に『三国志』の中ではしきりと軍事的天才振りが強調されているが—ことである。そのため、度重なる魏への出兵にもかかわらず、決定的な勝利を取めることができなかつたばかりでなく、相手の仲達にいいようにあしらわれたあげく、事態は膠着状態に入っていた。仲達にすれば、天下の奇才＝孔明に一步も引かないという評判を得ることが最大の成果だから、危険を冒してまで孔明との決戦を迫らずとも、持久戦に持ち込んでおきさえすればよいのである（そのためいらだった孔明は女性の衣服を仲達に送って、女々しい奴だと挑発したりした）。それによって確固たる名声を得、軍事力を掌握し、地歩を固めていって、いつでも魏に取って代わるだけの実力を培うことができた。その意味では『三国志』の描き方—たとえば「死せる孔明、生ける仲達を走らす」ではわざわざ「孔明は天下の奇才なり」と仲達に言わせている—とは反対に、実際は孔明が仲達の引き立て役になっていた。だから後に国内の反乱の発生を瞬く間に鎮圧し、また曹氏一族による反司馬氏クーデタ騒動に対しても機先を制して瞬時に一掃したりすることができた。これらが晋朝創設の確かな土台になった。こうした仲達の戦略もあって、三国鼎立が固定化して、全国統一が遙か彼方へと遠ざかることになる。その結果、蜀においては内部の統一にも雑音が入り込むことになってくる。それでなくても、にわかに建国した蜀は劉備時代からの古参勢力、荊州人脈、蜀内の投降組—それも劉焉配下だった集団と益州の地元の勢力の二派—など複雑な人脈を抱え、その統一には多大のエネルギーが必要であった。その中で、孔明は法治主義を基本に据えた国家建設と国力増強を実施していった。しかし三国の統一という錦の御旗を降ろせば、蜀の建国の意味も、そしてなによりもそれを構想した孔明の政治生命自体を失うことになりかねない。その意味では天下三分の計は終生孔明を縛り、その寿命を縮めた要因の一つであり、孔明死後も姜維以下の後継者に重たくのしかかる重課となり、やがてはその衰退を早めた。

以上のべた人物像は極めてユニークであり、これだけで十分に凡百の三国志論に数段も優っているが、それ以上に特筆すべきなのは、それらの人物像の描写の後で、彼らがそうした活動をし、あるいは失敗をせざるを得ない社会的な背景と階級的基盤と権力構造について、つまりは歴史的な条件と状況について、社会科学と歴史科学に則って総括している、その見事さである。

ここでの第一のキーワードは士族である。士族とは代々士官した一族を指し、官吏という高級官僚に就くには、第一に士人としての確かな身分、第二に経学に通暁する才能、第三に孝廉に推薦されているという徳が備わっていなければならず、士は平民の中で農、工、商に上位していて、読書人、つまりは頭脳労働者である。彼らは支配の中核を担う高級官僚であるため、次第に独占化—たとえば、袁氏は四代にわたって最高位の三公（司徒、司空、大尉）に就くなど—と身内の人間や社会的地位の低い人を推薦する推薦権と、相互に推薦し合う家族的・閥閥的な繋がりを作っていくことになって、少数の特定家族が突出し、かつ集中するようになる。そして彼らは当初の中小の地主から次第に大地主にまで登り詰め、世族と呼ばれる集団を構成して、外戚や宗室や宦官や大商人と結びついて支配の中核に盤踞するようになる。本来は世襲ができないにも拘わらず、実質的には半世襲化して、その特権を維持し続けようとする。400年以上続いた秦漢帝国は地主階級を支配勢力にして、君子—天子—を中心とする中央集権国家で、郡県制を取り、官吏の任命と派遣を行い、非世襲的であった。そこでは法家や儒家思想が基本となり、軍事力=暴力がそれを補完していた。これはそれ以前の時代が領主を中心とした邦国を世襲的な貴族制によって維持していた、いわゆる封建制とは異なっている。世襲せず、領地も持たない官僚制ともいうべきシステムでは、その登用は中央・地方からの推薦によった。一方で古くからの地主は貴族化していくが、それは皇族、外戚、諸侯などからなる貴族地主ともいうべきものである。他方で、支配の中核を現実に担う官吏は士族と呼ばれるが、世襲はできないものの、代々重要官吏になる名望家—袁家は四世三公を誇る名門—が現れ、事実上の世襲化し、士族地主化していく。それはやがては九品中正制（魏の時代に陳群によって発案された九品官人法がその先駆け）によって実体化するが、その弊害をなくすために、やがては官吏登用を試験によって行う能力主義的な科挙制度に発展していくことによって完成する。したがって、この時代、支配階級は貴族地主と士族地主の双方から成り、後者も名門士族（望族、勢族）とそうでない寒門、庶族とに二分される。漢末から三国時代など魏晋南朝の時代はその過渡的な時代であった。

さて、漢末は門閥（家柄や声望）に代わる軍閥（武功）が主役に躍り出る時代であり、皇帝の側近としての宦官と外戚の主導権争いが士族を後者が抱え込んで宦官の一掃を図るが、混乱のうちに共倒れし、地方で軍事力を養って軍閥化した土豪=武装勢力（董卓）が都を占拠する事態になる。これは乱暴にも皇帝の首をすげ替え、さらに自ら自立まで考えるようになって、さらに混乱は広まる。そこで反董卓連合が士族を中心にして結成され、自らも軍事力を確保して、地方に割拠するようになる。そこでは袁紹や袁術に代表される門閥と曹操や孫堅を典型とする新興の寒門出身者、さらには劉表や劉焉—さらには劉備も形式的にはそれに連なるが—宗室の軍閥が存在し、指導権争いを繰り返すことになる。それらの闘争は最終的には曹操の圧倒的な優勢を生み出すことになった。非士族政権の樹立という曹操の構想は、儒家に代わる法家

思想と相まって、和平、軍事双方での追求をしていったが、最高権力を渴望するようになって、士族からの猛烈な反発を受け、頓挫することになった。代わった曹丕によってその野望は実現するが、その代償は陳群による九品官人法の提案の受け入れである。それによって、士族はよりスムーズに権力に足がかりを得たばかりでなく、その際名門閥ほど有利になり、彼らの間の密かなインナーサークルを作り上げることになる。そして有力士族の支配が強まり、軍事的才幹に長けた司馬氏がその頂点に位置し、やがて彼らの頭上に王冠が軋げ込むことになる。その点では孔明は君主を名目上の元首にして、丞相を実際の政治を取り仕切る政府首脳に二元化することによって、士族の反発を抑えることに成功した。いわば、曹操が最高権力を渴望したときに地獄に突き落とされたのに対して、孔明は政治の理想像として天上へと舞い上がることになった。その意味で、曹操と孔明はこの時代の表裏一体を表す人物となった。

さてもう一つのキーワードは南北間の地域差である。長江を挟んだ南と北の違いは発展した先進地域＝中原としての北と、発展途上の南との違いとして認識される。したがって、南が中国全土の統一を図ろうとすれば、どうしても段階的な戦略を建てざるを得なくなる。まずは地盤を固め、次に中原、江東、荊州として鼎立し、荊州を奪取して天下を二分し、最終的には中原を制圧して統一するという戦略である。したがって、漢室に取って代わろうという考えは当初からは生まれてこなかった。しかも長江という天然の要害の存在は、北からの侵入を容易には許さない大きな楯にもなっている。相対的に自立している南の地域はまた安全でもあって、有力な勢力がなく、群小勢力の横並びでもあった。いわば土豪の連合体的な性格が強い。そこへ北からの働きかけや亡命者が集まることにもなる。孫堅もまた北からの移住者であり、その性格は孫権の時代になっても依然として残っていて、土着勢力との協調が容易ではない。そのことはまた、孫権の力が強大化して、呉を立て、君主になると、絶対的な権力者として振る舞うことができるようになる。そのことは孫権の後半生に暗い影を投げかけ、後継者をめぐりいざこざに丞相になった陸遜が巻き込まれ、孫権に憤死を強いられることになる。それには孫堅の配下にあった旧臣、北からの亡命人士、それに江東の名門一族の集合体であった呉が、士族化を現地化させることによって、その延命を図ったため、絶えず周囲を見舞わし、疑心暗鬼に襲われ、ことあらば一掃しようと躍起になり、殺害などの血なまぐさい事件を呼び起こした。これは孫権の老残を曝す致命傷となった。その基底には呉の地方政権化があった。

かくて曹操の野望、孔明の理想、孫権の現地化は最終的には軍閥化した司馬氏による士族政権に帰着するが、それも安定せず、長城を越えた異民族－牧畜民や狩猟民－の侵入と定住＝漢化によって、五胡十六国の騒乱と呼ばれる大激動に見舞われて晋朝は南下し、その後南北朝の並立を続けた後、最終的には北による統一化、つまりは短い隋とその跡を継いだ唐によって再び統一されるという隋唐帝国の時代を待つことになる。その間に369年もの長きにわたって、分裂と争乱と混乱の時代が続いた。それは秦漢帝国の時代が400年以上続いた後のことであり、

統一と分裂はほぼ同じだけの時間を要したことになる。易中天は本書の最後に「語り尽くせたとはいいたいが、さりとて、語り尽くせるものでもないだろう」⁵⁾ という印象的な言葉で締めくくっている。余韻を残す言葉である。

3. 『三国志』から現代中国と世界を推理する

以上みた三国時代の歴史物語は多くの教訓を残し、現代中国を考える際の糸口を与えているようにも思われる。というのは、『三国志』は中国人なら誰もが知っている物語で、彼らの日々の生活の隅々にまで浸透し、骨肉化・皮膚化しているからである。そして大きな歴史的な変動が起きるときには、この物語が繰り返し想起されるからである。その意味では歴史的な発展の教訓というよりは、万古不易的な構造的なものだとされるきらいもある。もちろん、人々の営みが織りなす歴史物語には、「発展」＝変化と「構造」＝反復の両面があり、両者のそれぞれの領分と相互関連を考えるのは重要な勘所である。それらについての検討は他に譲る⁶⁾として、ここでは今日の重要課題である中国の国内統治と米－中－日のトライアングル関係に焦点を当てて、少し論じて見よう。

第一は中国のめざましい経済発展—それも「世界の工場」から「世界の市場」への一層の進展—とそれを担う中国共産党の一方支配の存続如何である。中国の市場経済化の進展はグローバル時代における世界経済に大きなインパクトを与えた。多くの人は西側資本主義への接近とそのメリットの「限定的な」活用—経済特区への外資の参入と輸出志向に始まる一連の流れ—が中国を「世界の工場」へ育て、さらにはその基礎上で中国全体が「世界の市場」としてさらに急進展した最大の要因だという見方を取っている。そうすると、中国政府の政策転換とその決断が大きな成功要因だということになり、中国共産党の指導的役割とそれを領導した鄧小平は傑物・大政治家だということになる。もちろんその側面は否定できないが、同時に資本主義体制はこうしたモノづくりの拠点＝「世界の工場」としての中国の存在なしにはグローバル経済下での未曾有の成長と発展を実現できなかったことも事実であり、そういう意味では中国が西側世界を必要としたばかりでなく、場合によってはそれ以上に資本主義側が中国を必要としたのであり、資本主義が危殆に瀕した社会主義をいかに包摂していったかが大事になる。これはまた中国側から見れば、資本主義の今日の発展と存続の命運を中国が握っているという自負心に繋がってくる。したがってこれらの両要因は双方向的で、相互関連的なものであり、一方での相互依存（牽引）と他方での相互対抗（反発）が鎬を削ることになる。前者が優れば相乗効果を発揮するが、後者が支配的になれば瓦解していく。その意味から、筆者はソ連・東欧の崩壊とそれに続く移行経済国への転換と、中国の市場経済化に始まる事態を資本主義のグローバル体制づくりのための「グローバル原蓄」と位置づけ⁷⁾、それがその他の途上国と先進国の生産・労働条件にも極めて大きな影響を与えたと指摘した。

しかし「世界の工場」から「世界の市場」への進展は多くの課題を中国国内へとシフトさせることになった。中国国内市場の整備、資本主義システムへの編成替えが至上命令になり、その下で外資との競争にも勝利することが戦略的な課題となる。そうすると、中国資本の足腰を鍛え、自立的基盤を育てることがなによりも大事だが、これまでの、政府による基盤整理と助成や各種優遇措置による政策的誘導と厳格な管理・規制に加えて、企業の民営化による経営基盤と資本蓄積の強化ばかりでなく、技術革新—そのためには模倣化から自前化への転換が必至になる—、経営能力の陶冶、従業員教育、流通機構の整備、マーケティングのノウハウの蓄積、さらには原価計算や財務管理などの会計処理等々、多くの点での競争条件の強化が必要になり、これはまさに資本主義そのものである。そういう意味では冷戦体制崩壊後のアメリカ、ヨーロッパ、日本の「大競争時代」の到来が移行経済国や「社会主義市場経済国」中国にも波及し、その中に包摂されたと規定した方が適切かも知れない。しかもこれを中国に即して考えて見ると、市場経済化の深化は生産における資本主義的原理の貫徹ばかりでなく、消費の増大は消費社会の到来を生み、それは当然に市民社会の成熟化を要求するようになる。人権、自由、公平、民主主義、情報公開、核家族化、女性の進出、教育向上等々、先進資本主義国が通過し、深化させてきた市民社会の規範が当然に随伴してくる。これらの処理を共産党一党独裁体制下で達成可能であろうか。なるほど、資本主義工業化のテイクオフをはじめのには、強固な共産党政権の支えは最大の後ろ盾であった。西側諸国がそれこそ垂涎の出る思いで見えていたであろう。わが国でも新幹線や高速道路網を敷設するとなれば、私有地の買い上げだけで莫大なエネルギーと資金を必要とする。並みの政権では到底達成できない課題である。それを土地国有化の下にある中国ではいとも簡単に達成可能になる。まさに一党独裁政権という強力な打ち出の小槌を握っているからである。しかし市民社会の成熟化へはこの打ち出の小槌は効かない。今までのやり方の延長でそれを模索するとなると、公安警察を中心にした情報統制・操作や監視制度、検閲制度、密告制度などや、対外的なナショナリズムの鼓吹による内部的な一体観の醸成といった使い古された手段を精緻化して展開することになり、一時的にはともかく、長期的には到底成功を収められるようには思われない。そうすると、共産党という「現代の君主」（グラムシ）の下での実際の政治を担当する実質的な統治者が別に用意される、二元体制が生まれるのだろうか。こうした共産党の変質化を期待する論調もある⁸⁾。共産党の実質的な変質化が始まっている兆候は確かに確認できるが、だからといって実質的な権力を譲ってその背後の名目的な君主としてだけ君臨するとは思えない。中国の最高指導者は国家元首、共産党総書記、中央軍事委員会委員長という中国流の権力の中枢を一人で兼務している。その下で行政府の長＝國務院総理は一体どれだけのフリーハンドを持ちうるのだろうか。もちろん指導部を構成する共産党中央政治局の常務委員会は一枚岩でなければならず、その内部対立が実際にはどんなに熾烈でも、外部には常に一致団結していなければ共産党支配は維持できない。したがって、こ

とあるごとに意志統一を図っている。

これに関連して、共産党官僚の特権維持のための種々の画策がある。官僚制度は能力主義に基づく選抜されたエリート集団の組織であり、それがどんなに有能であっても任期期間中だけの特権であり、共産党の場合は事実上終生のものになったとしても、一代限りである。だが支配が強固になり、長期化してくると、それを継続的に次代に継承させ、半世襲化したいという願望を強く持つようになる。それは官僚の自己保身と特権維持の本能でもある。しかも共産党内部での有力者によるインナーサークルの結成とその持続化は官僚組織のルートを使ってしっかりと、密かにビルドインされている。それらは自分たちの特権の維持と延命に精魂を傾けて努力している。これを打ち破る秘策は生まれるのだろうか。それを内部から打開できると期待することは極めて困難ではないだろうか。ソ連・東欧崩壊の教訓が天安門事件に生かされているからである。

もう一つは東アジアにおける米-中-日の関係である。オバマ政権の誕生以来、世界の情況は大きく変化してきている。唯一の覇権国として、帝国への野望を膨らませたアメリカは一転して、地獄へ突き落とされ、オバマ政権は平和の擁護者としての役割と協調路線を主軸においている。そしてアジア重視を掲げ、米-中主軸のG2論⁹⁾を展開している。それと日-米間の同盟関係も大きな曲がり角にきている。そうすると、米を間に挟んだ日、中とのトライアングル関係はどうなるのか。このことを考えてみよう。オバマ政権の基本的戦略は日米間は一心同体的な強固な同盟関係であるのに対して、米中関係は相互の利害の上に立った戦略的パートナーシップであるとみている。前者が半ば恒常的なら、後者は状況が変化すれば解消可能である。米中重視は経済的には両者の相互依存関係の深まりを反映しており、お互いを当面は必要不可欠にせざるを得ないような二国間経済関係が定着しているからであり、そのことは他の先進資本主義国にとっても同様である。そして「世界の工場」から「世界の市場」への展開はその必要をさらに強めることになる。他方で日米同盟は実質的には日本の対米従属であり、しかもそれは安全保障から、経済、文化など包括的なものになるにしたがって、一方ではより強固に、盤石なものになったと賞賛する向きもあるが¹⁰⁾、他方では対米従属の深化が日本側の対米負担の増加になり、その結果、かえって危険水域に近づいてきたと見る向きもある。「対等な日米同盟の構築」という要求は言葉としては正当ではあっても、その実体からすれば、空念仏に近い。その結果、アメリカは日米同盟という安全パイを手許にもったまま、中国との交渉を有利に進めようとしてきた。他方で、日中関係は日本が独自に交渉しようとする度にアメリカに厳しく掣肘されてきたため、抜本的な打開には至らず、どちらかといえば、よそよそしい雰囲気のまま、「経熱政冷」状態になっていた。

しかしながら、日本からの対等な日米同盟の構築や東アジア共同体の結成という要求には、その底に国民の長年の宿願を体している側面もあり、日中を含む東アジアに平和的で、互恵的

で、共存・共栄的な地域を作り上げたいという共通の願いが込められている。そうすると、東アジアの国々が主体になって共同してアメリカにそのことを強く要求していく機運と条件をどのようにして作り出すか。その基本戦略の構築が求められている。その際に、当然に中国は独自の構想を持っているだろうが、日本こそがこの日-米-中のトライアングルの中核に座するような画期的で独創的な構想と戦略を提示する必要があるのではないだろうか。日本の平和憲法の存在、軍事的超大国ではないという条件、精緻なモノづくりのシステムとOJTに代表される労働者陶冶の経験、TQCに見られる共働的（コラボレート）な改善運動の経験、優秀な中小企業の広範な存在、全体的な合意形成を粘り強く追求する会議システム、勤勉で真摯で友好的で、努力を惜しまない仕事への取り組みやその姿勢など、われわれの周囲を見回せば、世界のどこにたいしても堂々と披瀝すべき利点はたくさんある。そして世界のどこでも多くの人々は同様の利点をもっているのだから、それをどう組織化するかが大事になる。またこれらの利点の多くは実際の労働現場や職場・地域で人々が主役になって自ら身につけたものであるにも拘わらず、その本来の姿が歪められ、切り捨てられ、失われている現状を適切に批判し、本来の姿に立ち直らせることが大切である。それにはそれらの知財化も必要になる。そうすれば日本はもっと国際社会での発言権を得られるし、それにふさわしい内実をもった国民による国になりうる。世界、とりわけ東アジアの人々が日本に期待しているのは、そうした日本の役割であり、それに向けた回天の姿勢ではないだろうか。そうしてことを連想させるのも、『三国志』の力なのではないかと思うと、「語り尽くせたとはいいがたいが、さりとて、語り尽くせるというものでもないだろう」という易中天の最後の言葉の含意を改めて噛みしめることになる。まだまだ幾多の創意工夫による打開の余地はあるはずだし、前途は必ず開かれるものである。

最後に私が座右の銘にしている諸葛亮の『誠子書』の一節を掲げておこう。

澹泊明志 寧靜致遠 靜学才志（無欲でなければ志は立たず、穏やかでなければ道は遠い。学問は静から、才能は学から生まれる。学ぶことで才能が開花する。志がなければ学問の完成はない）。

（2009年12月2日脱稿）

注

- 1) 原著は易中天『品三国』上・下巻、上海文芸出版社刊、上、2006年7月、下、2007年3月。邦訳は易中天『三国志 素顔の英雄たち』鋤柄治郎訳、富山房インターナショナル、上2008年、下2009年。
- 2) 同上、下、417頁。
- 3) 同上、上、126頁。
- 4) 同上、下、344頁。
- 5) 同上、下、470頁。

- 6) たとえば、フェルナン・ブローデルとその影響を受けたエマニュエル・ウォーラーステインの考えの是非についての検討など。
- 7) 詳しくは関下稔『多国籍企業の海外子会社と企業間提携—スーパーキャピタリズムの経済的両輪—』文眞堂, 2006年, ならびに同『国際政治経済学の新機軸—スーパーキャピタリズムの世界—』晃洋書房, 2009年, 参照。
- 8) たとえば、呉軍華『中国 静かなる革命』日本経済新聞社, 2008年。
- 9) 米中主軸のG2論と日米同盟に関しては最近の拙稿で概説した。関下稔「オバマ政権の新外交戦略と日米同盟—スマートパワー・戦略的パートナーシップ・体制的従属国—」『立命館経営学』第48巻, 第4号, 2009年11月, 参照。
- 10) たとえば、ケント・カルダー『日米同盟の静かなる危機』渡辺将人訳, ウェッジ, 2009年。

(関下 稔, 立命館大学特任教授)